

9. 肺血栓症の ^{123}I -IMP 肺血流シンチグラフィ

加藤 邦彦 小野 恵 高橋 恒男
柳澤 融 (岩手医大・放)

^{123}I -IMP 肺シンチグラフィの first pass にて肺血栓症例における局所の肺血流の有無をみる有用性を $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MAA 肺血流シンチグラフィと比較検討した。その結果、肺梗塞を伴わない肺血栓症例では $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MAA 肺血流シンチグラフィで欠損を示した部位に集積が見られ、また時間とともに集積が増加した。一方、肺梗塞症例では first pass および delayed image とともに明らかな集積は見られず、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MAA 肺血流シンチグラフィと類似した像を示した。このことから、 ^{123}I -IMP 肺シンチグラフィにて肺血栓症例における局所の血行動態をより鋭敏に知りうる可能性があると思われた。

10. 気道粘液線毛輸送系の画像処理

手島 建夫 井沢 豊春 穴沢 予識
三木 誠 本宮 雅吉 (東北大・抗研・内)

CONDENSED IMAGE MODE (CM), TRAJECTORY MODE (TM) と名づけた RI 画像処理の方法を用い、慢性閉塞性肺疾患 (COPD) 患者の気道粘液線毛輸送能を評価し、正常者と比較した。被検者に $^{99\text{m}}\text{Tc}$ アルブミンエロソールを吸入後、ガンマカメラを用いて計測し、 64×64 マトリックス、10 秒ごとのフレームモードの時系列画像として収録し処理を行った。正常者では実効移動速度、VL, 3.7 mm/分、移動した全ての道のりより求めた速度、Vsl, 26.0 mm/分であった。他方、COPD の CM は停滞、逆流の出現が著明であるが、順方向輸送のみを TM により解析すると VL, 3.6, Vsl, 14.5 mm/分で、Vsl のみに有意差が認められた。これは停滞率、SR の増加に起因するものと解釈された。

11. 新しい肝イメーシング薬剤 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -GSA の使用経験

永尾 一彦 鐘ヶ江香久子 加藤千恵次
中駄 邦博 藤森 研司 塚本江利子
伊藤 和夫 古舘 正従 (北大・核)

対象は肝硬変 6 例、肝硬変のない肝癌 6 例、その他 2 例。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -GSA 3 mg, 185 MBq (5 mCi) を静注し、3

分および 15 分後のスタティック像から次の指標を算出した。

$\text{LHL} = \text{肝}(15) / \text{肝}(15) + \text{心}(15)$, $\text{HH} = \text{心}(15) / \text{心}(3)$ 。
肝への集積度を表す LHL は肝硬変群に比較し、非肝硬変群で有意に高値を示した。血中クリアランスを表す HH は LHL と逆相関が高度であった。また、LHL は ICG 15 分値と高い相関を示し、Alb, HPT とは中等度、T.Bil, GPT との相関は低かった。得られたイメージに関しては、肝外分布がほとんどなく、腫瘍との境界も明瞭な良質な像が得られた。本薬剤は肝予備能評価に対する今後の臨床応用が期待される。

12. 肝血管腫と $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -標識赤血球シンチグラフィ

伊藤 和夫 古舘 正従 (北大・核)
桑原 真一 早坂 隆 佐々木春喜
菅原 俊 保浦 真一 渡辺 豊
斎藤 弘 (函館中央病院・内)

1 年以上の臨床経過、血管造影および生検にて診断された 22 症例 (27 病巣) に関して施行した $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -標識赤血球シンチグラフィ (RBC-SPECT) の肝血管腫に対する診断率を検討した。

肝腫瘍サイズが 2 cm 未満と 2 cm 以上では RBC-SPECT の肝血管腫に対する sensitivity, specificity および accuracy はそれぞれ 20% (1/5), 100% (3/3) および 50% (4/8) と 100% (12/12), 86% (6/8) および 95% (18/19) であった。巨大肝細胞癌の一例が疑陽性となった。RBC-SPECT は 2 cm 以上の肝腫瘍性病変での肝血管腫の鑑別診断法として感度が高く、非侵襲的検査法として再認識すべきである。

13. 外傷性肝 Bilioma の 1 例

西澤 一治 (弘前市立病院・放)
佐藤 浩一 (同・外)

肝外傷に伴った比較的稀な肝内胆汁性嚢胞 (Traumatic intrahepatic biliary cyst), いわゆるビリオーマ (bilioma) の 1 例を報告した。肝損傷後 9 日目の CT で嚢胞出現あり、4 週目の CT で巨大な嚢胞形成を見た。肝機能所見の正常化に反比例して血清 ALP の上昇あり、胆道系の圧上昇、肝内胆汁貯溜によるビリオーマの疑いで胆道ス